ミスティック☆マギカ　－母を訪ねて見滝原－

ガチムチアーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミスティック☆マギカ　ー母を訪ねて見滝原ー

【Ｎコード】
Ｎ９４３７Ｘ

【作者名】
ガチムチアーク

【あらすじ】
まどか☆マギカの世界に、ミスティックアークＥＤ後の主人公が生まれていたら。
というお話です。主人公は原作から男（レミール）のほうを選びました。
時間軸は本編とおりこ☆マギカを合わせたのを予定しています。
原作の人死にを抑えつつ、ちょっと切ない感じに仕上げたいと思っています。

ーあらすじー

鹿目まどかに絡みつく、膨大な数の因果。
それは、潜在魔力の急激な増加を伴う。
その不自然な魔力を感じ続けていた、女神の子レミール。
母に共通する『女神』の感覚を頼りに、日本へと渡る・・・。

プロローグ　―因果が呼ぶは女神の子―（前書き）

プロローグですので、まどマギキャラは出てきません。
ご注意ください。

プロローグ　ー因果が呼ぶは女神の子ー

分厚く空を覆う曇り空。
まだ肌寒い3月の風に吹かれた岬。
強い風の音と岩肌に波打つ音を背景音に、一人の少年が海の向こうを見据えていた。
鉄の籠手に革の具足と腰から下げた長剣、白のクロースを着込んだそれは、中世の冒険者を思わせる。
まるで輝きを放つような金髪。
女性と見間違えるほどの見目麗しい顔立ち。
首ほどで結わえた長い金髪が、風に踊り狂うのも気に留めず、翡翠の瞳が水平線の海を見据える。

「・・・やっぱりだ。たった数日で、格段に強くなってる」

少年は古ぼけた羊皮紙の地図を広げる。
すると、まるで見計らったかのようにポツポツと、雨粒が降り出した。
タイミングの悪さに、少年は軽く溜め息をつく。

「・・・まったく、間の悪い」

小さく吐き捨て、少年は振り返って駆け出す。
雨脚の強さに比例して、少年は駆けた足を速める。
田舎風景に構えた牧草地や麦畑でいそいそと雨宿りする人達に挨拶を交わし、髪を濡れそぼらせたあたりで、教会に辿り着く。
少年が教会のドアを開くと、教会の長椅子に寝そべった修道女が上体を起こした。

見た目こそ二十半ばほどの修道女で、顔つきを整えれば美人の部類に入るだろう。が、寝ぼけ眼とよだれを垂らしたその顔は、百年の恋も一瞬で冷めてしまうだらし無さだった。

「おはようさん、レミール」

「もう『こんにちは』ですよ、シスター・コルト」

呆れ顔でレミールが言うと、銀髪の頭を掻きむしってコルトは再び上体を長椅子に預けた。
教会に響くいびき声に、レミールは呆れたままで呟く。

「この人はいつ起きてるんだろう？　ま、今は好都合かな」

教会の階段、二階の居住まで駆け上がる。
薄暗い室内、ランプに火を灯す。
明るく、はっきり見渡せる室内には、電化製品の類は一切ない。
家具は全て年季の入った木製。
火を使う窯、山水を汲み上げる手動のポンプ。
テレビもラジオもなく、娯楽は本棚に敷き詰められたものだけだ。

「さて、と。早いうちに準備しとこう」

レミールはベッドの下に潜り込み、荷袋を引っ張り出す。
野営で使う小さめの調理器、干し肉に水筒、金貨の詰まった袋が所狭しと詰まっていた。

「日本でも、金が換金できればいいんだけど」

本棚から数冊を、更に持っていた羊皮紙の世界地図と方位磁石を荷

袋につっこむ。
無駄なく入った荷袋を見て満足気に頷く。
すると、木目の階段が軋む音が響く。
レミールが慌てて荷袋を戻すと、ふらふらとしたコルトが情けない声で言った。

「レミール～、メシ～」

「はいはい。適当に作るから、もう一眠りしてなよ」

「イエッサぁ～・・・ｚｚｚ」

「立ったまま寝ないでよ・・・」

雨音の響く室内に、コルトのいびきとレミールのため息が響いた。

ーーーーーーーーーー

雨雲は去り、月明かりが窓から差す。
台所を、エプロンを下げたレミールが無駄なく動く。
ランプの灯を頼り、ミートパイとシチューをテーブルに並べる。
と、その匂いに反応してか、コルトがようやく目を覚ました。

「・・・あれ？」

「こんばんわ、シスター・コルト」

こんばんわの部分に皮肉っぽい音程を加えるが、コルトは気付かず空いた腹をさする。

「食っていい？」

「シスター？」

強調して言ったレミールに、コルトはめんどくさそうに返す。

「はいはいわかってますって。主に感謝を～、いただきまーす！」

作法なんて飾りだと言わんばかりに、コルトが料理に食いつく。
いつものことだと慣れきったレミールも、深く気にせずに席に着く。

「主に感謝を、いただきます」

コルトと違い、しっかりと作法をこなす。
が、料理に手を運ぶ前に、レミールが言った。

「シスター・コルト。俺が拾われたのは、日本だったよね？」

「むぐ？　いきなりどしたんよ？　まぁ、質問にはＹＥＳと答えとこう」

「いや、ただ確認したかっただけだよ。けど、日本のどの辺りかは気になるけど、知らないかな？」

「さぁ？　当時、地方だった場所が都市開発進んで、今じゃ名前そのものが変わってるし。て言うか、当時の名前も覚えてないし」

「そっか。シスターは当時、船で日本に来たんだっけ？　東に行った港町から？」

「そうだけどさぁ、なんでそんな食い付くん？　あ、恋焦がれたぁ？」

「そんな性癖、当店では扱っておりません」

互いに冗談を交え、レミールは話を切り上げたい意として、食事に手をつけ始めた。

ーーーーーーーーーーー

翌日。

木々の葉に朝露が纏わる早朝。

荷袋と小盾（バックラー）を肩から背負い、舗装とは無縁の土の道を歩き進む。

ふと、レミールが振り返った。先には、今まで家として暮らしていた教会がある。

迷いを振り払うかのように、頭を振って歩を戻すと、よく見慣れた人物の顔があった。

「ハロー、不孝少年」

「シスターに孝行へと足る尊敬なんてありませんよ？」

「さも当然と言うなよ、可愛げない」

コルトはわざとらしく、拗ねたように頬を膨らませる。

「何時から、気付いてました？」「何で、言わなかった？」

重なる声、交わる瞳。

冗談交じりなど微塵もなく、続く沈黙の間に、風が吹き抜ける。

根負けしたのは、レミールだった。

「・・・言ったら、決意が鈍りそうだった」

「出生探し、か。よくもまぁ、そこまで溜め込んだもんだね」

「熊狩りって、結構儲かるんですよ」

「うわぁ、やりたくなーい。で、決意は鈍った？」

「残念ながら」

今度は冗談交じりのやり取り。
それを聞いたコルトは、混じりけ無く笑って、革袋を投げ渡す。
ずしりと重いその中身は、レミールの貯めこんだのと同じ程の金貨。
そして、真新しい日本地図。
その一点、丸で記された部分。その地名は、見滝原と記されていた。

「お前ってさ、変わってるっつーか大人びてるっていうか。昔っから、見た目に不相応だったよなぁ」

「実は前世持ちなんですよ。信じます？」

「救いを期待して信じます。救い以外は信じません」

「シスターってさ、俗っぽいっていうか現金っていうか。昔っから、見た目に不相応でしたよねぇ」

「ホント、可愛くない返し方するなぁ、この少年は」

言い合い終わって、互いに笑い合う。
と、レミールが静かに言った。

「ただ拾われた場所って言うなら、こんなに急がなかったんですけど。ここ数日、日本から感じる・・・魔力っていうのかな？　なんとなく、膨れ上がってる感じがするんです」

「膨れ上がってるねぇ・・・。表現にヤバめな気配しかないんだけど？」

レミールの話を、コルトは与太話と捨てること無く受け入れる。
内心嬉しくなりながらも、レミールは続ける。

「ただ、似てるんです。『母親』の感覚と・・・。いや、同一人物じゃなくて、同じ・・・種族の気配、かな？　でも、ひとつだけ。はっきりと言えます」

レミールは深呼吸をひとつ。
コルトは言葉を待つ。

「いてもたっても、いられなくなった」

コルトは、笑みをひとつ。
レミールの背に歩き並んで、一言。

「いってらっさい」

レミールは、振り返らず、力強く。

「行って、きます」

答え、歩き出す。
空を見ると、夜暗の後は形を潜めていた。

プロローグ　―因果が呼ぶは女神の子―（後書き）

はい、シスター・コルトはオリキャラです。
さすがに日本暮らしで、レミールって名前はありえなさそうでしたので。

プロローグ・見滝原　―女神の子と女神候補―（前書き）

ちょっと原作より手を加えています。（さやかや仁美の行動に）

プロローグ・見滝原　―女神の子と女神候補―

白黒の床、チェス盤を思わせる模様の廊下を、一人の少女が駆ける。
桜色の髪、赤いリボンで短めのツインテールに整えたそれが、駆けた衝撃で揺れる。
幼気のある顔は、前だけを見据えて走る。
が、その足が何かにつまずく。

「ひゃっ！　とっと！」

勢いをそがれた少女は、つまずいたものを見る。
それは、透き通るようなクリスタルをあしらったペンダントだった。

「・・・届けてあげないと」

少女はクリスタルを拾い上げ、制服のポケットにつっこむ。
クリーム色を生地とした制服のポケットは、思ったよりスペースがあった。
再び、少女の駆け出した先には、ひとつのドア。
決意を確かめるように、両手で力を込めて、ドアを開く。
目に飛び込む空は、暗雲の灰色。
巨大な大木を足場に、覗く目下は半壊した街並み。
そして、目前の空には虹色の魔方陣に包まれた、巨大な影。
巨大な歯車に、逆さから生える、青いドレスと口だけの顔をもった白い女性の巨人。
その巨人に、ビルの屋上から相対する影がひとつ。
後ろ首に結えた、輝くような金髪。
翡翠の双眼、女性のような顔立ち。

鉄の籠手に革の具足、白のクロースを着込み、その手には長剣を携えた少年だった。
少年が何かをつぶやくと、巨人の周りに炎が現れる。
炎は紅蓮の空気となって流れ、循環し、巨大な灼熱の大嵐となる。

「すごい・・・」

少女は自然と呟く。
これなら、白い逆さの巨人も無事では済まない。

「無駄だよ。彼の力じゃ倒せない」

突如、少女に向いた言葉。
発したのは、白い獣。
イタチに似た体に、猫に似た頭。その頭からは、長い耳が垂れた生物。
そして、言葉は現実となって、少女の目に映る。
ようやく止まった炎の嵐から覗かせた巨人の姿には、傷ひとつなかった。

「うそ・・・」

まるで心臓を殴られたようなショック。
そんな少女を、巨人は嘲笑い、見せしめのように、魔方陣から無数の光を放つ。
虹色の破壊を、少年は最小の動きで、くぐり、転がり、飛び避ける。
だが、飛び散った破片が少年の動きを妨げる。
その一瞬、向かう光に反応出来なかった。
直撃だけは避けたが、衝撃でビルの端まで吹き飛ばされる。
何とか落下せずにすんだ少年に、少女は安堵の息を吐く。

巨人は、そんな少年の姿を嘲笑っているのか、笑い声を響かせたまま、何もしない。

「そんな・・・。こんなのって、ないよ・・・！」

「これは当然の結果だよ、まどか」

白い獣が、少女に向かって言う。

「いくら魔法が使えても、彼は人間だ。奇跡を糧に、エントロピーを凌駕した魔法少女と比べれば、彼はあまりにも非力だ。だというのに、魔女との戦いに加わってきた。これはその代償。言わば、然るべき罰なんだよ？」

楽しげに話す、白い獣の声を、まどかは聞きたくなかった。
少年が立ち上がろうとすると、巨人の笑い声が止まっていることに気付く。
まどかは、咄嗟に動く。
少年に危機を知らせようと。だが、遅い。
巨人から見れば、それは牛歩にも等しい。
魔方陣から放つ、一閃の光。
少年の咄嗟に構えた剣身を、無力と罵るようにへし折る。
その光は、折れた剣を砕き、少年の胸を貫いた。

「ッ！！」

まどかの息が止まる。
信じたくないという意思を、目に映る現実がはねのける。
少年の体が、力なく、支えのない空の地面に倒れかける。
と、まどかの意識はそこで途絶えた。

ーーーーーーーーーー

少女らしく、沢山のぬいぐるみの並ぶ部屋。
まどかの意識は、ベッドの上で覚める。
抱きまくら代わりのぬいぐるみごと、上体を起こして、ため息混じりに一言。

「はぁ・・・夢オチぃ・・・？」

ーーーーーーーーーー

「いってきまーす！」

口に食べかけのパンをくわえ、レンガの道を駆け出す。
道が木々に挟まれたところまで来て、気付いたように呟く。

「さやかちゃんは日直、仁美ちゃんは海外で社交界かぁ・・・」

少し寂し気に、木漏れ日差し込むレンガ道を歩く。
突然、揺れた茂みから黒猫が飛び出す。
まどかの目が、寂しさを吹き飛ばすように輝いた。

「エイミー！」

「にゃ～」

「よしよし、おいでー」

飛び出した黒猫は、まどかの差し出した手に駆け寄る。

抱き上げると、エイミーが何かを加えていた。
それは、透き通るようなクリスタルをあしらったペンダント。
それは、まどかの夢に出て来たものと瓜二つだった。
プレゼントと言っているのか、エイミーはまどかにペンダントを渡す。

「なんで、夢の・・・」

「ああ、やっと見つけた」

エイミーが飛び出した茂みから、女性のような声。
覗かせたのは、後ろ首に結わえた輝くような金髪。
声に違わぬ、見目麗しい女性のような顔立ちと翡翠の双眼。
その姿は、まどかの夢に出た少年を、そのまま映し出したそれ。
唯一の違いは、白地の学生服だけだ。
学生服を除けば、女性にしか見えない容姿に。そして、夢と変わらぬ姿に、まどかは惚けながら呟いた。

「綺麗・・・」

「えっと、面と向かうと照れるかな・・・」

「あ、ご、ごめんなさい！」

真っ赤になって、思い切り頭を下げる。

「あの、このペンダントって・・・」

「ああ。落としたところを、その子に拾われてね。すばしっこくて、追いかけるのが精一杯だったんだ。君のおかげだよ、ありがとう」

「い、いえ、ど、どういたしまして」

ぎこちなく、ペンダントを手渡す。
受け取りに手が触れた瞬間、少年の表情が変わった。
驚いたような顔に、まどかはつい不安を抱く。

「あ、あの、どこか壊れたりと、か・・・？」

「いや、ペンダントの事じゃないんだ。ただ、君が俺の知人によく似た感じがしたからさ。・・・そうだな」

少し考え、少年はまどかに手を差し出す。
握手を求めるそれだが、緊張気味のまどかは、戸惑ってしまう。

「俺は、レミール。レミール・フィンガーチップス。今日から見滝原中学校に通う留学生だ。これもなにかの縁だろうし、友人になってくれないか？」

「あ、えっと、こ、こちらこそ・・・」「ちょっと待った」

遮りの言葉に固まるまどか。
レミールは困ったように言う。

「せっかく友人になるんだ。敬語も緊張も無しにしてほしい。どうだろうか？」

「あ・・・」

まどかは、気付いたように深呼吸を一つ。

そして、レミールの手を握り返した。

「私、鹿目まどか。この子はエイミー。見滝原中学校の二年生だよ。・・・よろしく、レミール君」

「ああ、こちらこそ、まどか。ファーストネームでいいかな？」

「うん。外国だと、名前で呼び合うんだよね？」

「ああ。エイミーはまどかの飼い猫？　首輪してるみたいだし」

「えへへ、実は違うの。よその飼い猫だと思うけど、私も詳しくは知らないの」

「へぇ、飼い主以外に懐く猫も珍しいね」

「私も猫好きだから、つい面倒見ちゃうんだ。・・・っと、そろそろ歩かないと遅刻しちゃう」

言って、まどかは抱き上げたエイミーを下ろす。

「えへへ、またね」

「エイミー、君とも友人。いや、友猫かな？　まぁ、よろしくな」

「にゃ～」

挨拶代わりに一つ鳴き、茂みに戻っていく。

「レミール君、行こっか？」

「ああ。実は、まどか友人になってくれて安心してるんだ」

「どうして？」

「学校の場所が分からなくてさ」

「あはは、そうだったんだ」

他愛もない話で、木漏れ日レンガの道を歩いていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9437x/

ミスティック☆マギカ　－母を訪ねて見滝原－

2011年10月26日14時09分発行